

アカマツ雪害木調査の注意点

—松くい虫被害の感染源としての危険性調査—

1 はじめに

マツノザイセンチュウ（以下センチュウ）は主にマツノマダラカミキリ（以下カミキリ）が小枝を食べた傷口からマツに侵入しますが、産卵するときを作る傷口（産卵痕）から侵入し、増殖することもあります。そのため、冬に発生した雪害木が夏にカミキリの産卵を受け、翌年の感染源となることも考えられます。本報告では、雪害木にカミキリやセンチュウが寄生しているか調査をする場合の注意点についてお知らせします。

2 カミキリの寄生調査

カミキリの寄生の有無は、カミキリが産卵するとき樹皮に作る「産卵痕」、幼虫が樹皮下を食べたときの痕跡である「食痕」、幼虫が冬を越すために材内に形成する「よう室」の形態で判断し、最終的に「幼虫」で判断します。

産卵痕（写真-1）は、産卵期の7～9月に形成されます。産卵期の初期である7～8月は他に判断できる材料が少ないので産卵痕を探してください。

9～11月になると幼虫は盛んに樹皮下を食べ、特徴的な細長い木くず（写真-2）を残します。また、幼虫は樹皮下にいます。この時期は樹皮を剥ぎ、食痕を探すとともに幼虫を捕獲して種類を判定してください。カミキリの胸部背面には二つの丸い模様があります。なお、この木くずの一部は樹皮の外にも排出されます（写真-3）。倒れた木の幹では、上面に排出された木くずがこんもりと盛り上がり、林内では比較的気づきやすい目印となります。

10月以降になると幼虫は材内によう室を作ります。新たによう室への材入孔が形成され、その形状が判断材料となります。良く似た食痕や材入孔を残すものにビロウドカミキリ類がいます。ビロウドカミキリ類の材入孔はマツノマダラカミキリに比べて楕円形の形をしていますが、両者の食痕の厳密な区別は難しく、最終的にはよう室部分をナタなどで削り、内部にいる幼虫で区別します（写真-4）。

3 センチュウの寄生調査

センチュウは、雪害木の幹からドリルで材片を採取し、それを研究機関に送り調査を依頼してください。材片は茶碗1杯分位を採取し、ビニール袋に密封して送付してください。また、センチュウは局所的に分布することがあるので、1本の調査木でも位置を変えて数箇所から採取してください。



写真-1 産卵痕



写真-2 食痕



写真-3 排出された木くず

マツノマダラカミキリ

ビロウドカミキリ類



丸い模様が二つある。淡色だが縁がはっきりしている。



茶褐色に彩られるが、縁ははっきりしない。



細長い白色の木くずが大部分を占める。面的に広い食痕。乾燥していることが多い。木くずは外部に排出される。



細長い白色の木くずに茶褐色の木くずが多く混じる。比較的直線的に長い食痕。湿り気味。木くずは外部に排出されない。



ビロウドカミキリ類の材入孔（楕円形でふくらんだ形）



マツノマダラカミキリの材入孔（扁平）

写真-4 マツノマダラカミキリとビロウドカミキリ類の区別

(担当 森林資源部 主任専門研究員 高橋健太郎)

連絡先	028-3623 岩手県紫波郡矢巾町大字煙山第3地割560番地11	TEL 019-697-1536
	岩手県林業技術センター	FAX 019-697-1410
	ホームページアドレス http://www.pref.iwate.jp/~hp1017/	